

## 論文要旨

所属ゼミ	小林 研究会	学籍番号	80730953	氏名	的場 大
<p>(論文題名)</p> <p style="text-align: center;">エレクトロニクス企業の多角化に有効な経営資源</p>					
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論文では、エレクトロニクス企業が多角化を進める上でどのような内部資源が有効であることを明らかにすることを主たる目的とする。具体的な研究課題は以下の2つである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多角化を達成するための基盤を企業内に育み、長期に渡って存続していく企業と、その基盤を持たないがためにコア事業の終焉とともに消滅してしまう企業に違いがあるとすれば、それを峻別する内部資源とは何か。</li> <li>・多角化を成功させる上で最も有効な内部資源は何か。</li> </ul> <p>上記の課題に取り組むことで、企業の実務家に対して、どのような内部資源が多角化を行う上で有効なのかを提示し、日本のリーディングインダストリーであるエレクトロニクス企業が今後どのような内部資源に力点を置いて変革を図っていくべきなのかの手がかりを提供したい。</p> <p>まず、理論研究および予備事例の分析からフレームワークを構築し、8つの仮説を設定した。次に日本のエレクトロニクス企業をサンプルに用いた定量分析と、成功企業の事例研究の2つによって仮説を検証した。その結果、以下のことが明らかとなった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・資金流動性を高め、思い立ったときにすぐに使える資金を確保しておくことは多角化に有効である。</li> <li>・提携企業数を増やし、ネットワーク力を強化することは多角化に有効である。</li> <li>・上記の2点より、今日のエレクトロニクス企業の多角化にはスピードの重要性が増しているといえる。</li> <li>・限定的ではあるが、トップマネジメントによる明確なビジョン構築能力、戦略の一貫性、多様性への対応力も多角化に有効である可能性がある。</li> <li>・技術や製品の多産多死を育むことのできる土壌を企業内に持っていることは、多角化の基盤となる可能性が強い。</li> <li>・コア技術による関連多角化によって、多角化が成功する確率を高められる可能性が強い。</li> </ul>					